

■（２１１）次への備え 最前線の小学校の取材も「想定外」

南海トラフ地震による大津波に備え、高知県南国市の大湊小学校の校区には８基の津波避難タワーがたつ。太平洋岸そばに広がる平な地域で、避難に適した高い場所がないためだ。かつて「命山」と呼ばれたそばの小高い山は削られて高知龍馬空港になった。

東日本大震災から４年１１カ月が過ぎた。被災地の現状だけでなく、次への教訓がしっかり伝わるかも大きな課題となる。全国の学校現場は震災前、防災教育に力を入れていたとは言い難い。児童・生徒らが「てんでんこ」で逃げた岩手県釜石市の事例を、全国の学校だけでなく、文部科学省も手本にして、津波からの防災教育を手探りで始めた。大湊小学校もそのひとつだった。学校や放課後のさまざまな場面を想定して、津波避難タワーへの避難訓練を繰り返す。教諭らがあえて指示を出さずに子供らに判断させる。そばの保育園児の手を引いて階段を上る。地域を巻き込んでお年寄りへの手助けの必要性も学ぶ。

そんな様子取材しようと学校を訪ねた。だが、インフルエンザで当日の朝になって急きょ日程が延期された。想定外を想定するのが備えの大切さ。自らの訓練になった。（山）